

114

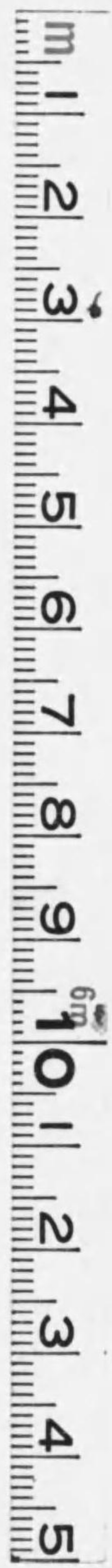
●
時局讀本
第二輯

支那事變と國際情勢

特 253 7
5 57
初政務次官松本忠雄述

東京中行館書房

10円



始



大正十三年四月二十三日
皇室
大正十三年四月二十三日
皇室

第七十二回帝國議會開院式勅語

朕茲ニ帝國議會開院ノ式ヲ行ヒ貴族院及衆議院ノ各員ニ告ク
帝國ト中華民國トノ提攜協力ニ依リ東亞ノ安定ヲ確保シ以テ共榮ノ實
ヲ舉クルハ是レ朕カ夙夜軫念措カサル所ナリ中華民國深ク帝國ノ眞意
ヲ解セス濫ニ事ヲ構ヘ遂ニ今次ノ事變ヲ見ルニ至ル朕之ヲ憾トス今ヤ
朕カ軍人ハ百難ヲ排シテ其ノ忠勇ヲ致シツツアリ是レ一ニ中華民國ノ
反省ヲ促シ速ニ東亞ノ平和ヲ確立セムトスルニ外ナラス
朕ハ帝國臣民カ今日ノ時局ニ鑑ミ忠誠公ニ奉シ和協心ヲ一ニシ贊襄以
テ所期ノ目的ヲ達成セムコトヲ望ム
朕ハ國務大臣ニ命シテ特ニ時局ニ關シ緊急ナル追加豫算案及法律案ヲ
帝國議會ニ提出セシム卿等克ク朕カ意ヲ體シ和衷協贊ノ任ヲ竭サムコ
トヲ努メヨ



共存

支那事變と國際情勢目次

□第七十二回帝國議會開院式勅語

□第七十三回帝國議會に於ける總理大臣演說拔萃

題字 外務大臣 廣田弘毅閣下

- △時局に對する政府の方針……………(二)
- △事變不擴大と局地解決の二大方針……………(四)
- △事變擴大の第一原因は蔣政權の排日政策と教育……………(六)
- △事變擴大の第二原因は共產黨の策動……………(三)
- △事變擴大の第三原因は支那の自力過信……………(一六)
- △支那人の自惚を助長せしめた二つの不祥事件……………(一〇)
- △忠勇義烈なる皇軍の働きに期待……………(四)

共榮

松本芳雄

弘毅

- △事變の目的は日支の共存共榮にある……………(一五)
- △事變を徹底的に解決する事が必要……………(一六)
- △事變不再發の鍵は徹底的膺懲にある……………(一九)
- △今次事變を中心とした第三國との關係……………(三)
- △無責任極まる支那の出鱈目宣傳……………(三五)
- △無責任極まる支那の出鱈目宣傳……………(三七)
- △無責任極まる支那の出鱈目宣傳……………(三九)
- △出鱈目宣傳に踊つた第三國の態度……………(四〇)
- △三國の態度など問題にする必要はない……………(四一)
- △對ソビエト關係はかう見る……………(四三)
- △對イギリス關係はかう見る……………(四九)
- △世界中、東になつて來ても必ず勝つ……………(五二)

(佛教聯合會の時局講演に據る)

第七十三回帝國議會に於ける

近衛內閣總理大臣の演說拔萃

今や政府は帝國と眞に提携するに足る新興支那政權の成立、發展を期待し、是と兩國國交を調整致しまして、更生新支那の建設に協力し、依て以て東亞長久平和の基礎を確立せむとするものであります。勿論帝國が支那の領土並主權及支那に於ける列國の正當なる權益を尊重するの方針には毫も變る所はないのであります。惟ふに東亞の安定勢力たる帝國の使命は愈々大にして、其の責任は益々重きを加ふるに至れるものと言はねばなりません。此の使命を果し、此の任務を盡す爲には、今後と雖も多大の犠牲を拂ふの決意を要するは固よりであります。而も今日に於て此の決意を爲すに非ざれば、結局不幸を將來に貽すものであります。従つて現代の我々が其の犠牲を忍ぶことは、正に我々が後代同胞に對する崇高なる義務であることを信するのであります。政府は斯くの如き見解に基き、全力を擧げて支那事變に對處し、其の目的の達成に邁進せむとするものであります。

支那事變と

國際情勢

松本忠雄述

時局に對する政府の方針

第一に私は大綱みに此の度の時局に對する政府の方針がどこに在るかを概略申し上げます。此の度の事變が如何にして起つたか、如何なる終結を付けるかに付ては後刻多少詳しく申上げる積りではありますが、先づ初めに之に對する政府の根本的の認識と方針を申し上げます。

此の度の事變は其の因つて來るところは永年に亘る支那の排日の結果であります。而して此の度の事變が斯の如く擴大したのは全く此の事件が起つてから支那側が挑發的態度に出た結果であります。而して此の事變に付ては支那側の背後にはコミンテルン所謂赤化勢力の策動のあることを看過してはならないと考へるのであります。日本政府と致しては速かに支那側の反省を求めて時局を解決し而して東亞和平安定を速かに來したいと云ふ熱烈なる希望を持つて居ります。併ながら此の時局を解決する鍵は偏へに支那側が持つて居るのであります。詰り支那側が日本政府の態度方針を諒解して、日本政府が懐いて居る日支の親善提携、此の根本方針に支那が順應して來るなら

二
ば日本政府としては直ちに日支の間に相談を成し遂げるだけの決意を持つて居る。併し支那側が態度を改めない限りは時局の解決は困難である。斯ういふことになるのであります。其の結果と致しまして日本政府としては第三國即ち外國が支那に對して軍事上の援助をすることは時局の解決を長引かしめる故之を希望せず、是が日本政府の方針であります。尙此の度の事變に於て我が國が敵として打倒せんとするものは支那の善良なる民衆でないことは申す迄もない、抗日排日政策を執つて居る支那の支配階級並に軍閥に對して膺懲を加へて之を反省せしめることが此の度の事變の唯一の目的であります。尙列國との關係に於ては日本政府としては此の日支の間に重大なる時局が展開して居る際に他の第三國との間に事端を醸すことを欲しないことは申す迄もないことであります。従つて此の際に於ては第三國との間に問題の起ることを極力避けると共に、不幸にして何等か問題が起きたならば、成るべく之を小さく速かに解決する、斯う云ふ方針であります。而して此の事變に付て第三國が干渉して來ることは日本政府として受入れることは出来ない。若し第三國が日本政府の此の意向に反して介在し干渉して來るやうなことがあれば勿論之を御斷りすると共に、此の事變並に日支

の關係に付ての日本政府の心持方針、之を十分に説明して第三國をして諒解せしめることに努める、これが此の時局に付ての大體の政府の方針であると私共は了解致して居るのであります。斯ういふことが書類の上にはつきり書かれて居るかどうかは私も存じませぬが、私共は政府の行ふところを見て、大體此の程度の原則であると申し上げて宜からうと思ふのであります。

事變不擴大と局地解決の二大方針

此の度の事變が斯の如く擴大し、斯の如く重大な事變となつて來たことは支那側の挑戰的行爲に因ると申し上げたのでありますが、之に付て少しく説明を申し上げます、御承知の通り七月七日の晩、北平郊外の蘆溝橋事件が起きた時日本政府は之に付て二つの根本方針を決定したのであります。其の根本方針の第一は事件不擴大、第二は局地解決、之であります。申す迄もなく事件不擴大とは、もう起きた事件は仕方がないが、それ以上の大きな事件に擴大せしめないやうにするといふことであり、局地解決といふのは、事件の起きた場所は仕方ないが、それ以上の支那の廣い部分に迄擴大す

るやうなことをせず、成るべく狭く小さく片付ける、斯ういふ方針であつた。それ故に日本政府は此の事變が始まつて以來此の方針を以て進んで來たのであります。併ながら日本政府が此の事件不擴大、局地解決の根本方針を執つて進んで來たに拘らず、支那側は之に相應するやうな態度を執らなかつたのであります。併し其の場合に於ても日本政府は隱忍自重致して此の二大方針を是非貫きたいといふ方針を以て參つたことは、七月七日の晩に此の事件が起き、七月二十五日の晩に廣安門の事件、郎坊の事件が起り、支那側が事件を擴大致します迄我が政府が隱忍自重して居つたことに依つて既に明白だと思ひます。其の當時皆様のお耳にも入つたでありませうが、政府の方へも頻りに傳はつて參つたことは、此の事件解決に對する政府の方針に付ての國民の不満であつた。支那側があつた通りの暴慢無禮の態度を執り、挑戰的態度に出て居るのかして、何故に日本政府は事件不擴大、局地解決といふやうな方針に拘泥して居るのかと相當國民の方に不満があつたやうであります。併ながら政府は尙且事件を擴大しない方が支那の爲、日本の爲、東亞の爲に有利なりと考へて隱忍に隱忍を重ねたのであります。然るに今日から見れば日本政府の立てた此の二大方針は徹底的に覆つて日支

四

の全面的衝突にならざるを得なかつたのであります。

事變擴大の第一原因は蔣政權の排日政策と教育

然らば日本政府が斯の如く隱忍自重の態度を執つたに拘らず尙事件が斯の如く全面的に擴大して參つた其の原因は何であるかと申しますと

(イ) 其の原因の第一としては支那政府が多年執つて來た排日政策を數へなければならぬと思ふのであります。今日の支那政府、蔣介石政權、國民黨政府は排日といふことを以て政府の重要な政策と致して居るのであります。是は何故であるか、若し日本に支那から排斥されなければならぬやうな悪いことがありとすれば、是はお互に反省しなければならぬ。併し日本政府として又國民として支那から排斥されるやうな悪いことはしてゐないのであります。然も尙且支那が排日を標榜し實行するのは、是は全く今日の蔣介石政府が排日を國內政策として利用して居るからであります。蔣介石は南京に政府を定めて國內を統一しようとして居るけれども、支那國內には蔣介石に反抗する勢力が澤山ある。例へば山東の韓復榘、四

五

川の劉湘、雲南の龍雲、湖南の何健、廣東廣西の李宗仁、白崇禧等反蔣勢力は澤山あるのであります。其の反蔣勢力を一々力を以て打倒して行くことになれば到底速かに之を爲すことが出来ないばかりでなく、一方を押へて居る時には一方が勢を得る、一方を打倒すれば一方が勢力を盛り返すといふことになり、力で支那を統一する事は極めて困難となるのであります。そこで蔣介石政權が利用し始めたのが所謂排日抗日政策であります。排日抗日を以て國民に呼び掛けて、日本が支那を侵略しようとする、此の外侮がある、此の時に國內で對立抗爭して居ることは適當でないといふ言葉を以て國民に呼び掛け、さうして反蔣勢力を此のスローガンに依つて南京政府に追隨せしめることにしたのであつて、今日南京政府が國內政策として、排日政策を執つて居ることは看逃すことの出来ないことであります。斯の如く南京政府が排日抗日を以て重要政策と致して居りまする限り、日本と支那との關係は如何に日本が隱忍自重しても圓滿なる關係を樹立することが出来ないことは皆様も十分御理解下さることと思ひます。之が第一點であります。

(ロ) 更に今日の支那政府の教育の根本方針が排日教育に在るのであります。支那政

府は日本を排斥し日本に反抗することを以て教育の重要な指導精神と致して居り、幼稚園から小學校、中學校、高等學校、大學、總べての教育の課程を通じて排日が教育の指導精神となつて居るのであります。其の支那に於ける排日教育が如何に巧妙に行はれて居るかに付て二、三の例を申すならば、幼稚園の保姆は、幼稚園に集つた頑是ない子供に向つて斯ういふ話をする。

私の家の檐下に小鳥が巢を作つてゐた。さうして卵を産んで、一生懸命になつて卵を孵へして雛鳥が生れた。親鳥は餌をやつて育て、居りました。すると東の家から悪戯つ子が出て来て其の小鳥の巢を奪つて持つて行きました。親鳥は悲しうに鳴いてゐました。なんて悪戯な子供でせう。悪い子供でせう。皆さんは決してそんなことをしてはいけません。

そこまでは宜い、其の次に幼稚園の先生は何と言ふかと申しますと、

これは小鳥の話でありますが、お互の支那にも斯ういふことがあります。あの滿洲を御覽なさい、あの滿洲は三千万人のお互の兄弟が、丁度小鳥が巢を作るやうに巢を作つて楽しく住んで居ると、東から日本といふ悪戯つ子が出て来て此の

小鳥の巢を取つて行つてしまつたのです。ですから皆さんは大きくなつたら此の小鳥の巢を取返して來なければなりません。

斯う言つて、幼稚園の子供を相手に早くも排日教育が始まるのであります。斯ういふ教へ方が小さな子供の頭に如何に深刻な影響を與へるかは、平素教化の任に當つて居られる皆さん方は十分御理解下さること、思ふのであります。次に小學校であります。算術の時間に又排日教育が行はれて居るのであります。二十六から四を引けば幾ら残るかといふ引算の題であります。そこで生徒が、二十六から四を引くと二十二残りますと答へると、

さうです。二十六から四を引けば二十二残ります。支那は河北省とか、山東省とか、河南省とかいふ省が以前には二十六あつたのです。ところが其の中から奉天省、吉林省、黒龍江省、熱河省の四つを日本に取られたから今日は二十二しか残つてゐません。そこで皆さんは大きくなつたら此の日本に取られた四つを取戻して二十二に足す四の二十六にしなればいけません。

斯う言つて教へるのであります。更に修身の時間になるとどういふことを教へるか

いふと、斯ういふ話をする。

或る家の坊ちやんが大變美しい毬を持つて庭で遊んでゐました。すると東の家から子供が出て來て、君大變美しい毬だなあ、僕にも一緒に遊ばせないかと言ふので二人で毬遊びをしてゐた。すると東の家の子供が、君は此の毬を持つて歸つてはいけないよと言ふ。そこでこれは僕のだよと言ふと、君のでもなんでも持つて歸つてはいけないと言ふ、そこで毬の持主がべそを搔くと、それちや斯うしようぢやないか、君も持つて歸るな、僕も持つて歸らない、二人共持つて歸らないことにしようと言つて屋根の上に投げ上げた。毬の持主はべそを搔きながら家に歸りました。そしてあの毬はどうなつたらうかと心配して三、四日経て見に行くと、東の家の子供が何時の間にか其の毬を屋根から取つて自分の毬として遊んでゐたのです。何といふ悪い子でせう、悪戯つ子でせう、本當に憎い子供ではありませんか、皆さんはそんなことをしてはいけません。

と話す、さうして附加へて斯う言ふのです。

これは矢張り支那にあつたことです。あの朝鮮を御覽なさい、朝鮮はもとく支

那のものでありました。支那が守り立て、自分の龜として遊んで居りますと、日本が東から来て、俺にも一緒に遊ばせよと言つて、朝鮮を日本と支那と両方でやることにして居ると、日本は支那に向つて、お前は持つて歸つてはいけない、日本も持つて歸らない、朝鮮は獨立だと言つて屋根の上に投げ上げた。ところが何時の間にか屋根の上から卸して日本のものにしてしまつたのです。

支那人は斯ういふ話をするには非常に上手でありますから、さういふ話を作つて子供に教へるのであります。これが上級になると歴史を教へる時には、日本は支那から琉球を奪つた、臺灣を奪つた、又滿洲を奪ひ、北支那を奪ひつゝあるといふことを教へるのでありますから、詰り支那の學校では事に當り物に觸れて、日本は悪い國だと兒童の頭から學生の頭に刻み込んで居るのでありますから、其の結果は支那に於て排日が深刻になつて來ることは已むを得ない次第であります。

そこで此の排日教育が如何に恐ろしいかに付て一つの實例を申し上げたいのであります。これは廣島縣の或る資産家の跡取息子で帝大を出た學士ですが、事業に失敗して支那に行つたのです。湖南省のすつと田舎で日本人など一人もゐない處に行つて、

支那婦人を妻にして、一人の女の子が生れたのです。ところが不幸なことにお父さんもお母さんも間もなく亡くなつて、其の女の子は一人ぼつちになつた。ところが亞米利加人の宣教師がゐて、生前其の日本人と懇意であつたので、其の女の子を小さい時に引取つて育てたのです。ところが今年の春になつて其の宣教師は老人で故國に歸ることになつたが、娘を連れて行くことは出来ぬ。そこで元々これは日本人の娘であるといふので、宣教師は態々漢口まで出て來て日本の總領事館に話した。そこで總領事館では宣教師の永年の親切に厚くお禮を言つて、それでは總領事館で引取つて廣島の實家へ送り届けようといふことになつた。其の子供は丁度十二歳で、幼い時父母に別れたから日本語は出来ない、支那語と英語だけ出来る。而も支那人の子供として今日まで育つて來たのであります。そこで漢口の總領事館の者が其の子供に向つて、お前は本當は日本人の娘であるから、祖父、祖母のある國に歸るのだと話した時其の子供は何と言つたか、私は他の國を虐めたり奪つたりするやうな日本人の娘ではない、自分は支那人の娘であると言つてなか／＼聴かない、そこで色々話をして初めて納得が行つたといふことであります。此の話を聞いて私は如何に排日教育が恐ろしいかとい

ふ實例をまざぐ、と見せ付けられたやうな氣が致したのであります。申す迄もなく其の娘は日本人の血統を引いた我々と同じ大和民族の子供であります。それが過去何年かの間の恐ろしい排日教育の結果は、自分の血筋の親である日本を以て悪い國だ、又いけない人達であると思ひ込んでしまつたのであるから、大和民族の血を引かない元々からの支那人が排日教育に依つて如何に我が日本を憎み、如何に日本に反抗する心持が培はれて來て居るかは申す迄もないことであつて、支那に於て斯ういふ恐ろしい教育が行はれる限り私共は日支親善を到底望むことは出来ない。而して此の度の事件が折角日本が事件不擴大、局地解決の方針を執つたに拘らず斯の如く擴大しなければならなかつた其の原因には、斯の如き排日教育、斯の如き排日政策が重大な原因を爲して居ることを私は確信する者であります。是が第一點であります。

事變擴大の第二原因は共產黨の策動

第二の原因は南京政府の背後に在る共產黨の策動であります。蔣介石は嘗て若かりし日、日本に留學し、高田の師團で見習士官であつたこともあります。彼は明治四十

三年支那に第一革命の起つた時高田の師團を脱走して、歸國し其の後帝政露西亞が崩壞して共產露西亞になつてから露西亞に留學して、共產黨式の教育を受けて支那に歸り、廣東の南の黄埔に軍官學校、丁度日本の士官學校に相當する學校を作つた。さうして支那の青年を集めてそれに共產黨式の教育を施し、其の青年を中堅幹部とする北伐軍を率ゐて北へ攻め上つたのであります。蔣介石が北伐の軍を起して廣東から北へ攻め上つたのは大正十五年の七月のことであります。其の時彼に兵器、彈藥を供給したものは露西亞であります。彼に軍資金を與へたものも亦露西亞であります。更に露西亞は蔣介石の陣營にポロヂンとガロンといふ二人の露西亞人顧問を送つて一から十まで蔣介石の手を取つて教へ導いたのであります。其の顧問の一人ガロンといふのは變名であつて、ガロンこそは今日西比利亞に於て三十萬の赤衛軍を率ゐて日本と滿洲國に對して壓迫的の姿勢を執つて居るブリュツヘル將軍其の人であります。蔣介石は露西亞で教育を受け、露西亞の指導精神を吹き込まれ、而して露西亞から兵器、彈藥を貰ひ、軍資金を貰ひ、露西亞人顧問の指導を受けて、大正十五年七月北伐軍を起し、十二月揚子江頭の漢口に出て、昭和二年三月南京に出て今日の政府の基礎を築い

たのであります。其の後彼は南京から上海へ出て来ると、露西亞と結ぶよりも英吉利と提携した方が萬事に都合が好いといふので一遍に露西亞を足蹴にしたのであります。足蹴にはしたけれども、蔣介石の眞の心を支配するものは露西亞で受けた教育であり、又南京政府のあらゆる政治組織は常に莫斯科政府の引寫しであります。従つて今日の南京政府、又今日の蔣介石の背後でねぢを巻いて居るものは共産黨であります。殊に一昨年（一九三六年）十二月十四日西安に於て蔣介石が張學良軍の爲に監禁されたあの事件は間違なく共産黨の策動であります。さうして蔣介石が西安を逃れて再び南京へ歸ることの出来たのは蔣介石が共産黨と妥協するといふ條件を相當程度まで受け容れたからであります。従つて一昨年十二月以後の蔣介石と共産黨との關係はも一度縊が戻つて居ります。従つて今日の蔣介石及國民黨政府は餘程強く共産黨の支配を受けて居るのであります。殊に此の度の七月七日の事件が起るや其の翌日から中國共産黨は煽動を始めて居る、これは日本の計畫的行動である、此の日本の侵略に對抗せねばならぬと云つて一生懸命になつて活動した。此の共産黨の活潑な活動が起つた結果、此の度の事件がこんなに大きくなつたのであります。申上げる迄もなく共産黨の精神は我

が日本の國體精神とは絶対に相容れないものであります。支那が此の共産黨の指導精神に依つて動く限り我が日本は斷じて支那と同じ道行をすることは出来ないものであります。而して此の度の事件が斯の如く擴大せざるを得なかつた其の原因の一つには此の共産黨の策動のあることを看逃してはならぬのであります。是が第二の原因であります。

事變擴大の第三原因は支那の自力過信

併ながら此の二つの原因だけであれば問題はこんなに大きく擴大しなかつたと思ひます。如何に支那人が日本を悪く思つても、如何に共産黨が背後からねぢを巻いても支那の國民性として、日本には勝てない、自分の力が及ばないと思へば、支那人はそれでも冒險して反抗して来るといふ人種ではありませぬ。自分の力を計算し、相手の力を計算して、戦はずして勝敗の決明かなる場合は決してやつて来ない。ところが今日の支那は困つたことに、茲に第三の原因が出来たのであります。それは何かと言へば、支那人が自分の力を過信し自惚れて来たことである。これは支那人としては一應

尤もなことかとも思はれるのであります。と申すのは、支那は茲數年の間に餘程面目を改めて参りました。支那には二百二十萬の陸軍があります。申す迄もなく世界中で二百二十萬の常備軍を持つた國はどこにもない、支那あるのみであります。併し此の二百二十萬の軍隊は今から數年前迄は支那の各軍閥が、軍閥同士で戦争する爲の軍隊であつた、内輪の戦争に備へる爲の兵隊であつて、外國に向つて銃口を擬して居るやうな兵隊は一人もなかつたのであります。然るに蒋介石は此の二百二十萬の陸軍を大部分茲四、五年の間に巧みに之を中央の軍隊に引直したのであります。其の原因の一つとしては先刻申した排日抗日で、日本が支那を侵略する、これを防がなければならぬと言つて引付けたのであるが、最も決定的の原因は、之等の軍隊の給料を中央政府が負擔するといふことであつた。今までは其の給料は各軍閥の負擔であつた、ところが蒋介石は、これからは自分の方で給料を拂ふから中央の軍隊になれと言つた。申す迄もなく支那の軍隊は悉く傭兵で月給を貰ふ爲に兵隊になつたのである。又軍閥にして見ても、今まで自分の軍隊に給料を拂ふ爲に随分苦しい算段をして居る。ところがそれを南京政府が拂つて呉れるので、自分の負擔が無くなるから蒋介石の言ふ通りに

なる。又兵隊にしても、今までは自分達の首領から給料を貰つたといふものゝ、それも呉れたり呉れなかつたりする。ところが今度は南京政府が呉れるといふ以上確かである、斯ういふ心理と利害打算に付け入つて蒋介石は全國二百二十萬の軍隊、尤も其の全部とは言へないが、八、九分通り中央に隸屬せしめることに成功したのであります。而も是等の軍隊は數年前までは裝備は不完全なものであつたが、茲數年の間に金に飽かせて佛、伊、獨、チェッコ、米等列國から最新式の兵器を買つて彼等に當てがつたのであります。中には日本の陸軍にすら無いやうな新式の兵器が行渡つて居るのであります。であるから支那の兵は數年前に較べれば遙かに強くなつたことは否定出來ないのであります。殊に飛行機であります。此の戦争の始まる前南京政府の勢力下に屬する飛行機は千三百臺と云はれて居つたが、其の千三百臺の飛行機は或は伊、獨、佛、米、英等の列國から最新式の物を粹を抜いて買ひ集めたのであります。これが支那をして自らの力を過信せしめた原因の一つであります。而して戦争を始めて見れば支那側の大きな誤算であつたことが暴露したのであります。支那は斯う信じました。自分の持つて居る物は歐米の粹を集めた優秀な物である、日本も飛行機を持つて

居るが、支那のに較べれば問題にならない貧弱な物であると考へてゐた、これが支那が自力を過信する有力な原因の一つになつた。併し愈々戦つて見ると御存知の通り、成程飛行機其の物は優秀かも知れないが、實戦に臨んでは我が忠勇なる空軍の爲に惨めなる敗北をした、これは向ふから見れば大變な誤算であつたのであります。

次には南京政府の支配的勢力であります。四、五年前、滿洲事變の頃は、國民黨政府の支配力は南京を中心としたほんの狭い範圍にしか及ばなかつたのであります。然るに蔣介石は先刻申したやうに排日抗日を旗印として支那四百餘州の隅々までとは申せないが、是亦大體に於て九分通りまでは南京政府の政令の下に服従せしめることが出来たのであります。是は支那として面目の一大刷新であります。そこへ持つて來て支那は最近數年間に色々の事業が勃興したのであります。或は自動車道路の構築、支那には極く狭い道しかなかつたのが一生懸命になつて自動車道路を造つて、四百餘州どこへ行つても自動車の通せざる所なしといふ迄に整つたのであります。次に航空路であります、これが各地に拓かれた。今までは北から南へ行くのに三十日、四十日を要したものが一日で行けるやうになつたので、四百餘州といふものは交通上、通信上

又中央政府の威令を及ぼす爲に非常に都合好くなつたのであります。更に學校が出來、工場が建つた、新しい事業もどん／＼計畫されて、茲數年の間に支那は面目を一新したのであります。それを蔣介石は國民に誇つて、自分の政治の成績斯の如しと自慢したのであります。此の實績を見た外國人の中には、支那は最早昔日の支那に非すと申す人が澤山出て來たのであります。お耳にも入つたのでありませうが、一昨年秋頃から、支那から歸つて來る日本人、官吏、軍人或は旅行者等は口を揃へて申すことは支那再認識論であつた、支那を見直せ、今日の支那は昔の支那ではない、今日の支那は面目を一新したと頻りに力説した。其の力説した意味は、昔の一文無しの支那に較べれば今日の支那は幾らか金を持つて居るから見直せといふ意味であるが、支那人の方でそれをどう取つたかといふと、支那のこと、言へば一から十まで悪口を言ひたがる日本人が今日は支那を再認識せよと言つて居る、日本人が感服する程俺の國はよくなつた、強くなつたのに相違ない、斯う考へたのであります。

支那人の自惚を助長せしめた二つの不祥事件

そこへ持つて来て支那人をしてさう感せしめるやうな事件が困つたことに二つ出来たのであります。これは皆さんも御記憶でありませうが、一昨年八月下旬、四川省成都に於て大阪毎日新聞記者と上海毎日新聞記者の二名が殺された。それから九月初旬には廣東省北海に於て一日本人が殺され、續いて漢口に於て日本人警察官、續いて上海に於て日本の水兵が支那人から危害を受けたのであります。其の時帝國政府は斯の如く支那各地に於て日本人の生命に危険を受けることは容易ならぬことである、これは支那に排日政策があるからである、此の際徹底的に排日政策を改めさせなければならぬといふことになり、一昨年九月川越大使に訓令して、川越大使は南京政府に對して此の事件解決の爲の數箇條の要求を提出したのであります。而して若し支那が此の日本の要求を容れないならば日本としては最後の決心も致し兼ねまいやうに國論が反映したのであります。川越大使は南京政府に對して談判を始めて九、十、十一月の三箇月を経て、十二月の初めに如何なる結末を付けたかといふと、日本の出した條項は殆ど全部支那から拒絶されて、極く僅かの賠償金とか陳謝とかゞ通つたゞけであつた。併し日本は拒絶されながら黙々として此の談判の終末を付けたのであります。こ

れは日本政府としては別に見るところ期するところがあつてさうしたのでありませうが、支那人の方ではさう思はなかつた、支那が強くなつたので、日本の觸出しは大きかつたが、愈々拒絶すると黙々として引き退つた、今日の支那の勢力は日本をして黙々として其の要求を引き込ませずには措かない程に強くなつたのであると支那人は考へたのであります。

そこにもう一つの困つたことは所謂綏遠事件であります。只今陸軍が活動して居る北支の北京から北へ行つて張家口、張家口から西へ行つて大同、大同から北へ行つて平地泉、あの方面に皇軍が活躍して居りますが、綏遠の北の方に百靈廟といふ處がある。これは蒙古の徳王のゐる首府であります。其の徳王は今日皇軍と共に朔北の野に暴戻な支那軍と戦つて居りますが、其の徳王が一昨年（一九三六）十月兵を起して綏遠に居る傅作義の軍と戦つたのであります。其の時日本人で徳王の陣營で彼を援けた人が數人あつた、又滿洲國人で徳王の陣營に入つて援けた者もあつた。ところが徳王は傅作義軍と戦つて利あらず、百靈廟は傅作義軍の爲に占領されてしまつた。首府といふと大きいやうですが、人口は七百か、八百位であるので大した處ではないが、支

那の方としては、勝ちつけないのが偶々勝つたものであるから非常な喜び方で、事情を知らない者は、傳作義軍は日本と滿洲國と蒙古との三つが束になつて來たのに勝つた、もう今の支那は日本と滿洲國と蒙古とが束になつて來ても敗けない程に強くなつたと考へるやうになつた、又支那政府は如何にも其のやうに國民の間に信せしめるやうに宣傳に努めたのであります。そこで支那人は日本を侮る侮日となつて、日本など恐るべき國ではないといふ考が勃然として起つたのであります。斯の如く支那人は自國が非常に強くなつたと思つて居る、日本人でも支那は面目を一新したと言つて居る、そこへ彼等の考へて居ることが如何にも正しいといふことを證明するやうな事件が一つ、二つ起つた、そこで斯の如く強くなつた以上日本に對して積年の怨を報ひなければならぬといふ考になつてゐた、そこへ偶々起つたのが蘆溝橋事件であります。そして日本政府の方針は事件不擴大、局地解決であつた。そこで支那の方で考へるのに、日本は今迄支那との間の問題では針程のことを棒程に言つた。ところが今度の蘆溝橋事件に限つて、日本の方では事件を小さく成るべく穩便にと言つて居る、これは日本の柄に似合はないが、さういふ態度を日本が執るやうになつたのは、支那が強くなつたので衝突しては勝てないと思ふからさういふ態度になつたのだ、斯う支那の方では早合點をした。そこで日本の方で事件不擴大、局地解決と言へば言ふ程向ふは此の機會こそ支那としては積年の怨みを報ひなければならぬといふので強腰になり、日本が局地解決、不擴大の方針を以て進んで來たに拘らず、今日の如き全面的の日支衝突にならざるを得なかつたのであつて、私は此の度の事件が斯の如き大事變となつた原因として先刻來申した此の三つの原因があることを皆さんに御承知を願つて戴きたいと思ふのであります。これが此の事變の發端に付ての話であります。

忠勇義烈なる皇軍の働きに期待

併ながら事變が斯の如く擴大して參つた以上、如何に日本の初めの方針が事件不擴大、局地解決であつても、全面的衝突となつた以上我々は全力を擧げて支那に立ち向はなければならぬのであります。即ち今日皇軍は支那の北に、南に、陸に、空に、海に、忠勇義烈の働をして居るのは其の爲であります。我が皇軍は北支に事件が起り、それが上海に發展致してから、支那の全地域に於て戦つて勝たざるなく、攻めて取らざるな

しといふ眞に赫々たる武勳を樹て、居るのであります。我々は忠勇なる我が軍隊の働に依つて此の度の事變の完全なる目的を達する事を信じて疑はないのであります。

事變の目的は日支の共存共榮にある

然らば此の度の事變の目的はどこに在るかと申すと、此の點に付ては先般近衛總理大臣が第七十二議會に於て明かに國民の前に闡明せられて居る。此の度の事變に付て日本政府は領土を擴張する考は持つて居らないといふことをはつきり聲明されて居るのであります。我々は世界の歴史を回顧して、外國と戦争する場合に、其の初めから此の戦争に依つて領土は取らない、領土を擴張するのではないといふ目標を立て、戦はれた戦争は先づ無いと申上げて宜からうと思ひます。昭和十二年、初めて我が日本が斯の如き聖戰を戦ふのだといふことを申上げて宜からうと思ふ。我々は斷じて領土擴張の野心に依つて戦争をして居るものではないのであります。然らば此の度の事變の目的はどこにあるかといふに、畏くも第七十二議會開院式に當つて 聖上陛下が親しく御下し下さつた勅語に於て極めて明瞭であります。我が日本國は支那と共存共榮

して行き、支那と善隣の誼を重ねて行きたいのが政府の方針であり、陛下の大御心で在らせられる。然るに支那は之を理解せざるのみならず日本との間に事を構へる、そこで支那に對して反省を促さなければならぬ、其の爲に忠良なる軍隊は百艱を排して支那の山野に於て此の事業に従事して居るといふ御言葉があつたのですが、此の度の戦争は支那の反省を求め、支那との提携協力をする爲の戦争であると我々は考へて居るのであつて、それを爲し遂げることが此の度の事變の唯一の目的であると考へるのであります。

今度の事變を徹底的に解決する事が必要

而して此の點に付て我々の考へなければならぬことは、此の度の戦が起つたことは誠に不幸ではある、併し起つたことは致し方ないのであつて、而も昭和十二年に於て蘆溝橋事件を發端として此の日支衝突が起つたことを不幸中の幸であつたと申したいのであります。言葉は甚だ奇矯のやうであります、實は斯ういふ譯であります。支那は先刻申上げたやうに排日を以て政府の方針とし、國民は小さい時から、日本は悪い

國だ、いけない國だと教へ込まれて居る。而して支那人の頭にはもう日本など恐ろしくないといふ氣持が出来て居る。而して支那は金に飽かしてあらゆる角度から戰備を整へて居る、其の支那の戰備が如何に整つて居り進んで居るかは、此の事件が發展してからの支那と日本との戰爭の狀態に依つて明瞭である、斯の如き情勢に支那が置かれて居る以上日本と支那との衝突は何時かは必然的に起らざるを得なかつた、必然的に起らざるを得なかつたことを認める以上は、其の衝突が昭和十二年の今日に起つたことはまだしも仕合であつたと思ふ。これが今後三年後、五年後、七年後、十年後に起つたとしても、我々は支那に對して徹底的の膺懲を加へて勝たなければなりません。又勝つことを信じて疑ひませぬ。併し支那が今より以上に準備し用意を整へた後に日本が支那と戰つて勝つ爲に拂ふ犠牲と、昭和十二年の今日に於て拂はなければならぬ犠牲とを較べるならば、今日の犠牲の方が余程小さくて済むといふことを私は感ずる。我々は日本と支那とが戰はずして済むならばそれに越したことはないと思ふ、併し戰はなければならぬ運命に置かれて居ることを認むる以上は、今日此の戰を持つたことは不幸中の幸である。其の爲にこそお互は努力して居るのであります。而して出

征將士各位の御苦勞は一入であります。支那の曠野に骨を曝し血を流して國家の爲に死する將士の忠節を思ふ時涙無しにはゐられないのであります。我々は此の昭和十二年の今日に於て、我々の力に依つて此の事件を解決して我々の子孫をして安らかに暮さしめ、我が國家の將來をして益々安泰ならしめることが出来るならば、近衛總理大臣が日比谷公會堂から國民に呼び掛けられた如く、これは現代に生を享けた我々の名譽光榮でなければならぬと思ふのであります。其の代り今度のやうなことは再び繰返してはならぬと思ふのであります。最近の實例を申しても昭和三年には濟南事變があり名古屋の第三師團が出征して相當の犠牲を拂つた。又昭和六年には滿洲事變、七年には上海事變あり、我々が忠勇なる軍隊は滿洲に江南に、國家の爲に身命を賭されたのであります。其の血潮未だ乾かざるに今回の事變であります。もう澤山であります。五年六年度に一度宛こんな事が起きては堪りませぬ。そこで起きたことは仕方ないとしてこれきりで起らないやうに、其の爲には今度の事變を徹底的に解決することが必要であります。

事變不再發の鍵は徹底的膺懲にある

然らば今度再び繰返さないやうにするには如何にすれば宜いかと申しますと、支那に徹底的の打撃を與へて、もう日本には金輪際手向ひしないといふ風にしなければならぬ。支那人をして心から日本に兄として仕へる、さうして日本に手を引かれて、日本と共に生きて行き、共に榮えて行く、それが四億民衆の幸福であり、支那の國家の幸福であるといふことを骨身の髓まで思ひ込ませることが必要であります。これには我が忠勇なる將士の盡忠報國の働きに俟たなければならぬのであつて、此の忠勇なる軍隊が支那に打撃を與へることが大きければ大きい程、深ければ深い程目的は達せられるのであります。中には斯ういふことを言ふ人があります。日本が支那に徹底的の打撃を與へて果して日本と支那とは仲善くなることが出来るだらうか、支那に對して打撃を與へれば却つて支那人は日本を怨み反感を持つて、日支は結んで解けざる百年の怨を貽すのではないかと考へてゐる方もあるやうであります。併しこれは支那人の國民性から判断を願はなければならぬことで、尤も支那人の國民性を一言の下に申上

げることは極めて危険であります。此の點に付ての支那人の國民性を申上げるならば、其の國民性は力の有る者、強い者に向つては帽子を脱いでお辭儀をする國民性である。之に反して相手が弱いと思へばどこ迄もつけ上つて來るのが支那人の國民性である。従つて日本は強い、恐ろしい、日本に反抗することは結局自分達の仕合ではな

いと思へば、支那人は必ず日本と提携すると思ひます。これは過去の歴史が証明するところで、これは日本流で考へてはいけない、日本人の信念から言へば逆である。併しこれは外國から侵略されたことなく、又將來も侵略される事のない日本に於て初めて在ることであつて、支那の如く四千年の歴史に於て二十何代王朝が替り屢々征服されて來た國民に於てはさういふ原則は適用出來ないのであります。昭和七年一月二十八日上海事變起るや十四師團九師團が上海の閘北に於て支那軍と衝突して、閘北一帶に對して徹底的の打撃を與へた。私は戦後あの一帯に行つて見ましたが、丁度大正十二年の帝都大震災火災の跡のやうで、一望果なく焼野原となつたが、日本軍の爲に焼野原となり家を失ひ財を失つて身一つで逃れた支那人が戦火收まるや閘北へ歸つて家を建て店を開いてゐました。其處へ日本人が行くと道を歩く子供がお辭儀をしたさう

です。店へ入つて物を買つても、道を尋ねても大變深切丁寧であつたといふことです。大場鎮、廟行鎮、あの邊も激戦地であつたが、其處でも支那人はさうであつたといふことであります。ところが同じ上海でも南市とか城内とかの、上海事變の時爆弾一つ落さなかつた所へ行くと、日本人に對する態度は上海事變の前と同じやうに傲慢無禮であつたといふことであります。これが支那の國民性を説明して餘蘊なし、徹底的の打撃を與へた所では日本人に刃向つては損だといふので帽子を脱いでお辭儀する、之に反して手を觸れずに置いて、彈一つ撃たず、爆弾一つ落さなかつた所では何に日本位といふ風に考へて彼等の頭は高くなるのでありまして、我々は此の支那人の國民性を理解し之に適應することが必要であつて、我が忠勇なる皇軍將士の盡忠報國の至誠は必ずや支那人をして骨身の髓まで、日本とは孫子の末まで事を構へないといふ考を持たせると思ふのであります。斯くしてこそ眞の日支問題の解決が出来るのであります。丁度焼野原に草の芽が生えるやうに日支の新しい關係が生れて、陛下の大御言葉のやうに日支の眞の共存共榮が實現し得るといふことを私共は確信致して居ります。これが日支事變の私の見透しであります。

今次事變を中心とした第三國との關係

而して私の話は次に此の事變を中心とした第三國との關係に及ばなければならぬのであります。皆さんに於ては定めし此の點御心配のことゝ存するのであります。今日本と支那とが戦つて居る、其の時に第三國が文句を言つて來やしないか、又力を加へて來やしないかといふことであります。成程外國は此の事變に付て相當注文を付けたり文句を言つて居ります。併し此の事變に對する外國の關係は凡そ三段に分けてお考を願ひたい。其の第一段は七月七日の蘆溝橋事件が起きてから八月十日に至るまでの約一箇月の間であります。事件の發展から申せば此の度の事變がまだ日支事變にならず北支事變であつて、事件其の物が北支那に留つてゐた時であります。第二段は八月九日に上海に於て大山大尉事件があり其の結果事變が上海に擴大して、更に日支の全面的衝突となつた期間、即ち八月十日から九月十九日までであります。而して九月二十日以後を第三段として申上げたいのであります。何故斯ういふ段階を置くかと申しますと、九月十九日に第三艦隊司令長官長谷川中將が上海の各國領事に對して、南

京を空爆するといふ通告文を出した、さうして其の通告文を出してから外國の日本に對する態度が俄然變つて來たのであるから私は茲に第三段を劃したのであります。そこで其の三段階に於ける外國の動きを搔つままで申上げれば、第一段の此の事件が北支那に留つてゐた時代に於ては、外國は相當此の事件に對して關心は持つてゐたが、其の態度は極めて平靜であつたと言ひ得るのであります。即ち大體に於て、此の事件の爲に日本と支那とが戦争になることは好ましくなく、そこで若し間に立つて何かお役に立つことがあればどうか御遠慮なく仰せ付けて戴きたい、斯ういふ話であつた、丁度隣近所のお附合の言葉のやうにも聞えた。さうして支那に於ける外國人の財産又其の生命に危険の及ぼさないやうにして呉れといふやうな申出もあつたが、事件が北支に留つてゐた時に於ては外國の動きは極めて冷靜であつて、別に憂慮すべきものはなかつたと考へられたのであります。然るに八月九日の大山大尉虐殺事件を契機として事件が愈々上海に及び、揚子江一帯、中部支那一帯に波及するといふ様子が見えるや外國の動きは相當深刻になつて參つて、或は上海を中立地帯にせよとか、上海へ出した兵を引けとか、軍艦を引けとか、日本に對して色々の提案をし、又支那側にも同様の

提案をしたやうであるが、外國の眼の色も變り其の言ひ方も餘程深刻にはなつたが、併しさう心配しなければならぬやうなことはまだ見えなかつたのであります。然るに九月十九日長谷川司令長官が南京空爆に關する通告を列國に向つて出すと俄然として外國の態度は變つて來たのであります。それは此の通告が外國側に正しく受取れなかつたからであります。長谷川司令長官の出した通告は、九月二十一日正午までに南京にゐる第三國人は安全な場所へ自發的に避難して貰ひたいといふのであつた。日本は支那の軍事的中樞地である南京を空爆しなければならぬ、併し其の爲に第三國人の生命財産に禍が及んではお氣の毒であるからどうか立退いて貰ひたいといふ誠に行届いた、又極めて御丁寧とも云ふべき通告であつたのであります。我が空軍として斯ういふ通告を出すことは損であります。空襲は突如行ふべきもので、それを二日も三日も前から豫告することは作戦上非常に損であります。支那の方では其の間に用意して、高射砲は角度をちやんと定めて置く、大事な物は隠して置く、避難の準備も出来る、非常な歩が悪い、それにも拘らず公明正大な我が空軍は斯の如く通告したのであります。ところが外國はそれを何と取つたかといふと、日本は南京を隅々まで焼いてしまふと取

つたらしい。そこで色々文句を言つて来た、日本からの指圖によつて大使を他へ引越させるなど出来ないと言つて来た國もある、それ等に對しては日本政府は十分に説明したが、一方此の通告文は世界中の新聞に出たから、世界中の人間は、日本は愈々徹底的な爆撃をやるのだと思ひ込んでしまつた。斯くして日本空軍は二十二日南京を空爆し、同時に漢口、廣東に空襲を行つた。

無責任極まる支那人の出鱈目宣傳 その一

ところが漢口と廣東に加へた空襲に付ての誇大な通信が世界に擴がつたのであります。ロイテル、ユービー、アヴァス、エービー等世界中に通信網を持つて居るそれ等に依つて世界中に擴がつた。即ち漢口の空襲に付ては、日本飛行機の爆弾は軍事施設には一つも落ちなかつた、それは貧民區域に落ちて七百人の支那人が死んだ、其の七百人の中で子供が斷然多かつたと書いてある。又其の七百人の死骸は丁度蠅取紙に蠅が喰つ付いたやうであつたと書いてあつた。又廣東の空襲に就いては、此處でも爆弾は軍事的施設に落ちずして密集部落を狙つて落され、其の爲に三千人の支那人が十五

分間に殺されたと書かれ、英吉利の新聞の如きは、パーミンガムに比すべき都會が一瞬間にして潰滅に歸したといふ見出で書いて、それが世界中の新聞に出た。日本が愈々やるぞと思つて居る所へ斯ういふ通信が来たものであるから、愈々やつたと感じた。大體此の空襲に對する感じは我々日本人と外國人では大いに異なつて居る、と申すのは日本人は一度も落されたことがないから本當の恐ろしさは知らない。ところが歐羅巴人は數年に亘る歐洲大戰の時始終空爆に脅かされたものです。其の爲に親を失ひ子を失つた者も澤山ある、自分の家も焼かれた。さういふ經驗があるから、空襲に就いては非常に神経過敏であります。そこへ日本の飛行機が無防備地帯を空爆した、そして女子供を多數殺したといふ通信が行つたものですから、日本は酷いことをすると響いたのであります。これは全くの嘘であります。倫敦に居る吉田大使がロイテル通信社に對して餘り話が違ひ過ぎる、自分は倫敦に居るのでよく分らないが、どうも電報で傳へられるやうなことがあるべき筈がない、もう一度問ひ直して呉れといふのでロイテルでは廣東の方へ問合せた。其の返事が来てそれが新聞に載つたが、それに依ると日本の空爆に依つて死んだ者は全部で三十人にも達しない、日本の飛行機の

爆弾は飛行場、兵器廠其の他の軍事的施設に命中して居るといふことが明かになつたが、併しこれは後の祭で初め大きく出たことはなか／＼拭ひ去ることは出来ない。又香港に在る英字新聞のサウス・チャイナ・モーニング・ポストが態々特派員を廣東へやつて調べさせたところ、日本の飛行機に依つて廣東で死んだ者は九月二十五日までには百人以下であるといふことが分つた。ところが日本の飛行機が廣東を初めて空襲したのは八月三十日である、八月三十日から殆ど毎日のやうに、時には一日に二度も三度も空襲して其の間に殺された者が百人以下である、これは廣東市長の證明である。それを二十二日の一回の爆撃で十五分間に三千人といふのは全くの出鱈目であつたのであります。

出鱈目 宣傳 その二

九月二十七日には又一つの記事が外國の新聞に出ました、日本の潜水艦が香港の沖合で支那の漁船十何艘を次々に撃沈したといふ記事であります。其の漁船には三百人の支那人漁師と其の家族とが乗つてゐた、さうして助けを叫んで居るのに救はずして

次々に沈めた、日本の潜水艦が去つたあとに獨逸汽船シャルン・ホルスト號が通り合はせて十人だけ助けて香港に連れて來た、斯ういふ記事が世界中の新聞に出たのであります。此の潜水艦に就いても日本人が感ずるよりか外國人の神經には強く響く、あの歐羅巴戦争の際に亞米利加が參戦するやうになつたところの一番の原因は、獨逸の潜水艦が外國の商船に對して無警告の撃沈を加へたことが一番大きな原因であつた、それであるから潜水艦に付ては歐米は苦しい經驗を持つて居る、そこへ持つて來て現在地中海で怪潜水艦が滅多矢鱈に商船を撃沈して居る。であるから潜水艦の「せ」の字を聞いてもぶる／＼と來るところへ、日本の潜水艦が何百人の支那人を沈めたといふのであるから日本は酷いことをする國だと思ひ込んだのであります、これも眞つ赤の嘘で、其の支那人漁師を救つたといふシャルン・ホルスト號の船長がマニラや新嘉坡の獨逸領事に調べられて答へた所に依ると、成程支那漁師は救つたが、其の船がどうして撃沈されたかも知らない、日本の潜水艦など影も形も見えなかつた、其の場の様子から見て撃沈されたといふ様子はなかつたと言つて居るから間違ない。ところが英吉利政府は大層意地が悪い、其の十人を此の間から法廷に喚出して審判して居

る、それが十月十八日から行はれて居るが、新聞記事で見ると、裁判長が訊いて居るが、其の潜水艦はどんな形であつたかといふと、前の方と後の方に鐵砲があつたとか、煙突に丸を描いてあつたとか出鱈目を言つて居る、日本の潜水艦はそんなものではないさうであつて、又何と言つても信用出来ない支那人のことである、法廷で斯う言へと言はれるとどんなことを言ふか分らない、そこで獨逸船長の方が信用出来る譯であつて、そんなことは嘘であります。併ながら此の二つの事件が外國の日本に對する評判を悪くするには最も効果的であつたのであります。

出鱈目宣傳 その三

そこへ持つて来て九月二十七日にもう一つ事件があつた。支那政府が世界各國に向つて斯ういふ通告をした、昨二十六日に日本の飛行機が支那飛行機のマークを付けて支那の飛行場を空襲した、そこで支那のマークを盗用して居る日本飛行機の爲にあなた方外國人の生命財産が危害を蒙つても支那政府は知りません、斯ういふ通告をしたのであります。そこで事情を知らない外國人は日本の飛行機が支那のマークを付けて

空襲するといふことを信じて、更に日本に對する空氣が悪くなつたやうであります。

私はこれに付てはどうも證明の仕方がないが、斯ういふことが外國新聞に出、又支那政府の通告を信ずる外國人があることを實に情なく思ふのであります。日本空軍の勇士があゝの銀翼に生命を托して敵陣を爆撃に行くといふことは死出の旅路に上ることである。何時なん時どこで撃たれるか、不時著をするか、如何なる最期を遂げるかも知れない、生命を懸けての仕事に出掛けるのに、相手もあらうに敵のマークを附けるといふことは大和民族の心持として斷じてあり得ないことであつて、武士道精神を幾らかでも解する者には斷じて信じ得ざることであるのに、外國人の中それを信じた者があるといふことは分らないにも程があると思つて情なく感ずるのであります。

出鱈目宣傳に踊つた第三國の態度

斯ういふことが次々に出て來たものであるから、外國の日本に對する空氣は非常に悪くなつて、九月二十七日には國際聯盟の二十三國委員會で、日本の支那に對する飛行機の空爆は怪しからぬといふ決議をし、英米其の他の國に於ても盛んに日本に對す

る反對の決議が出、倫敦に於てはカンタベリー大僧正、英國皇帝戴冠式の時皇帝に冠を被せる役をするあのカンタベリー大僧正が司會者となつて日本反對の國民大會が行はれ、亞米利加に於ては労働黨が日本商品の不買を決議する、英吉利に於ても同様のことをする、斯くして世界各地に於て民衆の日本に對する反感が熾烈となつて來たのであります。これは實に遺憾のことでありますが、日本の空爆に對する支那の虚偽の宣傳、或は事實を偽つた宣傳の爲に日本に對する空氣が悪くなり、それに乘じて今後は第三國方面に於ける動きが次々に行はれて居る状況であります。

三國の態度など問題にする必要はない

併ながらこれも日が経てば段々分つて來て外國の方も鎮靜して來るであらうと思ひます。我々はさうなることを希望致しますが、外國がどんな決議をしようとも、どんな態度をしようとも、我々は敢て氣に掛けるに及ばないと思ふのであります。此の度の日支事變はこれをやつたら外國が褒めて呉れるだらうとか、外國は黙つて居るだらうとか思つて始めた事件ではない、支那から喧嘩を賣り付けられて日本が買はざるを得

なくなつて立ち上つた戦である、外國の態度を考へて始めた仕事ではない、始めざるを得なくなつて始めた仕事であるから、これに對して外國が何と言はうと、どんな決議をしようとも、どんな態度を執らうと、我々はそれに對してびく／＼する必要はない。我々は外國がどんな態度を執らうと、どんな決議をしようとも、唯天皇陛下の御指圖に従つて日本國民の盡忠に依つて信念に進む以外に途はないと思ふのであります。

更にお互に外國のやり方に付ては經驗済みであります。滿洲事變の時日本は國際聯盟で十三對一の孤立を味ひ、更に四十二對一といふ徹底的の孤立も味つたのであるが、如何なる孤立を味はうともお互の信念をどこ迄も貫いてあの滿洲問題を貫いたのであります。我々が眞に國民的使命に基いて其の信念を貫く時どこの國も文句を云ふ氣遣はないのであります。今日は滿洲問題に就いて日本を非難する國はありません。今度の事件に就いても亦然りと思ふのであります。我々がびく／＼して居ると或は色々な決議を繰返すかも知れない、併しお互が日本國民の國民的信念を以て些かの動搖もないことをはつきり示すならば、向ふも決議ばかりして恥を搔くのも餘り結構ではないと思つて好い加減のところまで止めるだらうと思ひます。私は第三國の動きが日本

に都合好くさうして日本を誤解しないでよく理解して呉れることを切に希望しますが、向ふが日本を誤解して、日本に對してどんなことをしようとも心配する必要はないのであります。

對ソビエト關係はかう見る

そこで第三の問題として對蘇の關係に就て一言申し上げたいのであります。日本國民の大部分の方々の御心配は此の日支の時局に對して露西亞の態度がどう出るかと云ふ點だらうと思ひます。露西亞が此の度の事件に就てどんな態度を執つて居るか。これは勿論政府當局としてもあらゆる角度から此の研究を遂げて居る、其の研究或は其の情報に就て色々内容を此處に申上げて居る時間もないし、申上げることも出来ないことかと思ひますが、我々が今日まであらゆる角度から研究しあらゆる角度から判斷した所の其の結果を申上げるならば、結論的に申上げれば、露西亞が此の日支の紛争の中に飛び込んで来て力に訴へて之に介入して来るやうなことは先づあるまいと思ひます。これが結論でありまして、其の結論の原因としては色々あるが、一つは露西亞の

今日の國情であります。

皆さん御承知の通り、露西亞はトハチエフスキー事件、あの赤衛軍の有力な將軍であつたトハチエフスキー元帥以下八人の將軍が叛逆罪で銃殺されなければならなかつたのは今年の春である。更にカーメネフ、ジノヴィエフ、ラデツク等、今日の共產露西亞を作り上げた第一の元勳であつた人々を悉く叛逆罪として死刑に處せなければならなかつた露西亞である。又毎日のやうに彼方此方で反革命罪と云ふ名前の下に露西亞の人民が殺されて居る。國內で相疑つて彼は反革命者、彼は反スターリン派と云ふやうに何十人か殺されつゝある状態の露西亞がさう切羽詰らない日支の紛争に自ら進んで飛び込んで来る餘力があるかどうか。私は此の點に就ては餘力はないと思ふ。

更に露西亞の今日の國際情勢はどうかと申しますと、露西亞は歐羅巴方面に於ては獨逸と對立して居る。露西亞と獨逸の關係は正に一觸即發の状態で、獨逸は虎視眈々として露西亞を狙つて居る。獨逸民族はあの六千萬人の人間が非常に狭くなつた獨逸本國に追ひ込まれて自分達の食物に不足して居る。獨逸人は腹一杯物を食つて居ない、六分目か七分目食つてお互ひ空腹を抱へながら其の食物を何に使つて居るかと言

へば、國防の充實に使つて居るのである。獨逸人と雖も此の空腹は子孫末代まで抱へて行かなければならぬと思ふならばこれは獨逸人は抱へきれない。併し獨逸人は前途に望みを有つて居ります。今腹を空かせて國防を充實して何處か良い所を貰つて其の時は腹一杯食ふのだと思つて居る。それが何處かと言ふと露西亞のウクライナである。ウクライナは歐羅巴の穀倉と言はれて居るくらゐ穀物のよく實る所であります。そこで獨逸は露西亞から歐羅巴の穀倉であるウクライナを取つて其の時こそ腹一杯食べようと、前途に希望を有つて今日國防を充實して居るのであります。従つて若し露西亞に何等かの隙が出来れば獨逸は直ちにウクライナを取りに行くかも知れない。露西亞としては此のウクライナを取られては心臓を取られたと同じことで堪らないと云ふ感じを持つて居るやうであります。さうして其の獨逸と日本は日獨防共協定を結んだのであります。其の條文の表を読んで見れば國際共產黨の策動に就て日本と獨逸が協同して之を抑へると云ふことであつて、何の變りもない所の條文であります。併しながら此の日獨防共協定の背後に流るゝ國民的感情、或は其の複作用は重視しなければならぬのであつて、此の露西亞を西から取つてしまはうとして居る獨逸

と、東から、これは露西亞を取つてしまはうとするのではない、露西亞の侵略を喰ひ止めようとして居る日本とが手を握つたことは重大な事であります。我々の頭に重大に響くよりは、其の眞ん中に挟まれた露西亞には定めしより重大に響くであらうと思ふのであります。

さう云ふ國際情勢に在る露西亞が此の日獨防共協定あるに拘らず、尙ほ日本に對して攻め込んで來ると云ふことは、日本から攻められて向うが戦争すると云ふのならば一か八かやるかも知れませんが、此方が何もしないのに向うから攻めて來るかどうかは私は疑はしいと思ふのであります。之を疑ふのは私共である。出て來ないと思ふのは私共である。併し露西亞は出て來るかも知れない。出て來れば出て來た時の話で、人間と云ふものは身代が左前になると滅多矢鱈に縮尻ばかりするから、露西亞も國歩艱難にして或は國家の大計を間違へてとんでもない所に乗り込んで身代を臺なしにするかも知れない。それは露西亞のお勝手であります。我々は露西亞は出て來ないと信ずるけれども、出ておいでになればおいでになつたことに對してそれだけの用意は完全に整つて居るのであります。私は出て來ないと信じます。

併し露西亞は、日本と戦争をしないとしても、支那を援助すると云ふ心配がありません。と申すのは、今年の八月二十一日に露西亞と支那との間に不可侵條約が出来ましたが、此の不可侵條約は、支那は露西亞の領分を侵さない、又露西亞は支那の領分を侵さない、お互に侵し合はないやうにしようと言ふ話で、雨が降れば天氣が悪いと云ふのと同じことでもあります。併し露西亞と支那との間に不可侵條約が出来たと云ふことはさう簡單には見る譯にいかぬのであります。何故かと申すと、露西亞と支那の間には外蒙古と云ふ問題があります。外蒙古は、支那の方では自分の領分の内だと申して居り、露西亞の方では外蒙古は支那の物ではない、これは支那から離れた完全な獨立國だと見て居るのであります。露西亞は昨年の七月に此の外蒙古と同盟條約を結んだのであります。露西亞が外蒙古と同盟結ぶと云ふことは、外蒙古が支那の物とは思つて居ない、別の物と思つて居るから同盟條約を結んだのであります。そこで支那は抗議を持込んだ、あれは俺の國の領分だ君の國があれを獨立國として同盟條約を結ぶのは怪しからぬと言つて抗議を提出したのであります。それで露西亞と支那との間でお互に侵すか侵さないかを決めるには先づ外蒙古がどつちに附くかを決めなければな

らぬ。今のやうに外蒙古を露西亞が獨立國と見、支那が自分の物と見るならば、侵さないと云ふ條約を結んだ其の瞬間からお互に侵し合つて居ることになる。詰り、露西亞が俺の物だと云ふならば、露西亞から見れば外蒙古を支那が侵す者となり、支那の方から見れば、露西亞が自分の領分を侵す者となつて来るから、此の不可侵條約を結ぶ前には外蒙古をどうするかを決めなければならぬ。それが何とか話がついたと思はれるのであります。それには二つの説があります。支那が外蒙古の獨立を承認したのだと云ふ話もあり、或は露西亞の方で外蒙古の獨立を取消して名義上還すことにして、其の外蒙古を支那の物として、露西亞が援助して、さうして北の方から日本の兵隊を攻めさせるのだと云ふ話もあり、どつちか分らぬが、此の二つ以上に行く途はない。何かそこに話がついて居ると思はれるのであります。さうして其の話がついた半面には露西亞が支那に對して何か援助するとか協力すると云ふ話があること、思ひます。併しながらこれも、露西亞が一體支那に對してどれだけ援助するか、其の援助する程度は大したものではなからうと思ひます。日本は今日海上を封鎖して居り、なか／＼大袈裟な物を海から持つて来る譯にいかぬ。陸地續きだと云ふ露西亞と支那に於

て、中央亞細亞に来て居るトルクシブ鐵道は丁度支那の新疆省の西を通つて居る、あの鐵道から支那に物を運んで來るならば運べます。蒙古の原野を通り新疆省を通つて兵器彈藥を運んで來ることが出來ます。併しこれも並々の仕事では出來ない。少々は出來るかも知れないが、さう澤山は出來ない。これは皆さん御承知の通り、日本でも支那事變が始まつてから支那の方に兵隊を送り軍需品を送るのに、世界で一番能率の高い鐵道である日本でさへ、思ふやうに運べなくて苦勞した經驗を今日本が味はつて居る。それは何千哩の野原を通つて物を運ぶのはさう澤山は運べないと思ふ。而して此の點に對する露西亞の援助も恐ろしい事はないと思ひます。

對イギリス關係はかう見る

次に英吉利との關係であります。これはなかく復雜な關係であります。英吉利は支那を尻押して居ります。それには色々な事情があるやうであります。何しろ英吉利は支那に何十億といふ投資をして居り、支那を拓いたのは俺だといふ考を持つてゐて、支那の見込のありさうな權益は大抵英吉利が持つて居る、支那に於て最も多く

の財産を持つて居るのは英吉利である、其の財産を日本が荒すのでは堪らないといふ考の出るのも尤もなことと思ふのであります。併し英吉利が支那に對してどれだけ援助するか、英吉利は随分勘定高い國であると私は思つてゐます。日露戦争の時には日本と英吉利は同盟國であつた、そこで英吉利は日本に對して或る程度の好意を持つて呉れたが、併しあの時と雖も英吉利は日本から一文も取らずには一挺の鐵砲も貸しては呉れなかつた、又一擱みの彈藥も供給して呉れなかつたのであります。ところが大正三年には日本は英吉利から誘はれて世界大戦に参加した。日本を戦争に誘ひ込みながら、其の日本に對する態度は、日本に分け前を成るべくやるまい、勝つても日本にさうやるまいとばかりした。さうして日本に對して英吉利は一圓の金も寄さなかつたし、一發の大砲の彈も寄さなかつた、英吉利は誠に勘定高い國であります。其の英吉利が支那に對してのみ鼻の下を長くして滅多矢鱈に金を注込まうとは思はれない、だから此の點はさう心配する必要はないのではないかと思はれるのであります。殊に露西亞と支那が接近することは英吉利にとつて一番大きな頭痛の種で、日本と支那が仲好くなつて來ることも恐ろしいが、それよりも支那と露西亞と仲好くなるのが一番恐ろ

しい。英吉利が阿片戦争を始め、又南京條約を締結したのは丁度百年前であります。過去百年の間英吉利は支那に對して非常な權益を持ち對支經營を行つて來たのであります。其の歴史に於て英吉利が支那に於て最も屈辱的の目に遭つたのは何時かと言へば、それは大正十五年から昭和二年までとあります。蔣介石が共産黨と結んで容共政策を行つて露支がしつくり組んだ時英吉利は酷い目に遭つたのであります。廣東では排英ボイコットが起り、香港でも排英ボイコットが起り、又北伐軍が揚子江岸の漢口に出ると、漢口の英吉利の居留地を腕づくで奪ひ取り、九江に出て來ると其處の英吉利居留地を取り返へした。支那と露西亞が結んだお蔭で英吉利は酷い目に遭つたのであります。此の事は英吉利が死んでも忘れはしないと云ふ。殊に又英吉利が最も心配するのは印度であります。露支が組んで印度を北から脅かすことは英吉利としては愈々自分の本家に火がつくことになるからこれが一番の頭痛である。殊に今日の實情では、新疆省では英吉利の援けて居る東干といふ民族がありそれが省の南の方に居る。これは英吉利から武器彈藥を貰つて新疆省を護つて居る。又北の方には盛世才が露西亞から武器彈藥を貰つてやつて居る。斯ういふ風に英露の勢力が新疆省に於て對抗し

て居り、先達て露西亞の飛行機が東干族に對して爆撃を加へたといふ記事が出てゐた、これは勿論小手先の戦争であるが、それが英や露の方に響かない筈はない。英吉利としては露支が仲好くなることは心配であるから、英吉利はさう思ふやうに支那を援け得ないのではないかと思ふのであります。歴史は繰返すと申します。明治二十七八年日清戦争の記録を讀むと、あの時の支那はどこを頼りとしてゐたかといふと露西亞である。日本が旅順を奪つても威海衛を奪つても、今に露西亞が北の方から來て取返して呉れると思つた。又英吉利も支那に好意を寄せてゐた。日本の艦隊が支那沿岸へ行くと英吉利の艦隊が居つて禮砲を撃つ、禮砲だから叱言を言ふ譯に行かぬが、それに依つて日本の艦隊がどこ迄來たといふことが支那に分つて、非常に日本にとつては迷惑であつた。又英國公使が日本外務省にやつて來て上海は中立にして、此は攻めないと云ふ事を一札を入れよと言つた。日本が支那と戦争するのに上海を攻めないと云ふ一札を入れろといふのもおかしいが、其の當時の日本政府はそれを入れざるを得なくなつて、涙を吞んで英吉利に對して上海は攻撃しないと云ふ一札を入れた、さうして英吉利は一生懸命になつて支那を援けた。ところが最後はどうかといふと、

支那は頻りに露西亞が北の方から来ることを大旱の雲霓を望むが如く待つたのであるが遂に來なかつた。そこで支那は英吉利こそ支那の好き味方、同志であると思つてゐると、愈々日本が勝つといふことが明白となると、今度は英吉利は日本に對して好意を寄せて來た、其の結果が日英同盟に迄發展したことは御記憶の通り、歴史は繰返す、今支那は北から露西亞の來ることを頼みとして居り、南から英吉利が援けて呉れることを非常に力強く思つてゐるのであります。併し日清戦争の時に清朝のやつた誤算が又今日の南京政府にないといふことを誰が保證出來ませう、歴史の指し示す通り此の支那の頼みとする二つ共空頼みとなり、結局支那は日本に對してお辭儀するより仕方がないと思ふ。そこで私は此の事變に付ては第三國との關係は別に心配するやうなことはない、又多少さういふことが起つても我々はびく／＼することはないと思ふのであります。

日本は支那はおろか世界中東になつて 來ても必ず勝つ

ところで日本と支那と戦争して勝てるかといふことであるが、これは殆ど言ふ必要のない程明白なことであります。ところが世の中には理窟を言ふことの上手な人があつて斯ういふことを申します。日本と支那と戦争して本當に勝てるでせうかと言ふ人がある。何故かと尋ねると、日本といふ國は機械で申せば精密機械である、ところが支那といふ國は組織の無い國で、謂はゞ原始的の機械である。日本は精密機械であるから砂一粒入つても機械は動かない。支那の方は大雑把だから砂利を一掴み位入れても支那の機械は動かないことはないだらう。其の組織の無い支那と有る日本とが戦ふのであるから日本は割が悪いと言ふ、更に巧妙な譬が皆さんのお耳に入つて居るでありませう。支那は蚯蚓のやうなものである。蚯蚓は成程弱いが五つに切つても七つに切つてもびく／＼生きてゐる。日本は獅子のやうなもので、成程強いことは強いが、心臟を撃たれると斃れる、蚯蚓と獅子と戦ふのであるから日本の方が割が悪いと言ふのです。譬としては面白い話であるが、我々は此の世界で文明を否定しない限り、學問を否定しない限り、制度を否定しない限り、組織の無い者が組織のある者に勝つとは斷じて考へられぬことであります。若し此の世の中で組織の無い者が組織のある者

に勝つといふならば、誰が苦勞して組織を作つたり制度を作つたりする者がありませんか。制度や組織のあることが本當に強くなることであるからお互に苦勞して作るのではありません。これを證明するものは學問であり文明であります。學問と文明を否定せざる限りさういふことは信ぜられない。向ふが譬話で來るならこちらも譬話で行くこととして、お店で帳面を記入するのに大福帳があり、又新式簿記がある。大福帳をやつて居る者は、新式簿記などは赤インクや青インクを使つて、帳面は何冊も要るし、あんな面倒なものは駄目だ、大福帳は一冊で間に合ふと申します。併し大福帳一冊で商賣を經營することが最も有効なものであるならば、誰があんな面倒なことをする人がありませう。過去の經驗に於て、新式簿記の方が遙かに有利であるからこそお互苦勞してやつて居るのであります。此の譬に依つても組織の無い支那が勝つといふ議論は問題にならないと思ふ。もう一つの議論は、支那の方は戦争するのに金がかゝらぬぢやないかと言ふ。日本は二度の議會に於て二十五億の事變費を出した。ところが支那の方では五億圓の公債を起した、日本はすると五倍使ふぢやないか、五倍使つて當座は勝つても長い間には財布の底をはたいてしまひはしないかといふ議論であります。成程

これも一つの理窟であります。然らば日本が二十五億要る時に支那は五億で濟むかといふことである。其の第一は支那の兵は金がかゝらない、食ふ物は其の土地々々で徵發する、其の代り自分の國の人民から怨まれる。ところが日本の兵隊は食ふ物から着る物まで全部こちらから持つて行かなければならぬ、日本兵は寸毫と雖も侵さず。それでであるから今日北支に於ても、支那兵が行くと鹽を蒔いて追ひ出す、日本兵が行くと日の丸の旗で迎へるといふ有様で、金はかゝらないかも知れないが自國民から見放されるやうなことで戦争に勝つことは絶対にあり得ないのであります。それともう一つは支那の方では大砲の彈も買つて居る。で射つてしまへば買はなければ無い。ところが日本の方は射てばどんくあとから補充して何時でも十分持つて居る、二十五億の金は支那に向つて射つてしまふのではなく、それを補充する準備の爲に掛けて居る。ところが支那の方はそんなことをしないから金がかゝらない。其の代り買ひ置き物を射つてしまへばあとは續かない、だから日本が勝つに決つて居る。尙良多いが日本には天子様が在まし、二千六百年の美しい國體があります。支那のどこに我が皇室に較べ奉るべきものがあるか、又國體がありませんか。これがある限り日本は勝つ、

支那に對してのみならず、世界中が東になつて來ても敗けないだけの確信があるのであります。此の認識此の信念の下に立つてお互は協力同心して此の大事業を爲し遂げなければならぬのであります。殊に皆さんのやうに國民精神を扱ひ、心の動きの方を握つて居られる宗教家としては其の間に更に多くの御協力を願はなければならぬ點があるものであります。私共のやうに先祖代々佛教意識の中に育ち佛教に對して因縁的、先天的に深き關係を持つて居る者から言へば、皆さんに此の時局に對して御協力を願ふことこそ此の時局に對して十分の成果を擧げる唯一の途であると思ふのであります。お互持場々々に従つて十分の仕事をして遂げることが亦眞の舉國一致の姿であると信するのであります。(終)

<p>時局讀本第二輯 支那事變と國際情勢 〔定價拾錢〕</p>		
<p>發賣所 東京市神田區神保町一ノ三九番地 有精堂書店 振替口座東京四、〇六八四番</p>	<p>昭和三十三年二月一日印刷 昭和三十三年二月五日發行 (不許複製)</p> <p>著者 松本忠雄 發行者 丸山茂 印刷者 東京市淺草區淺草橋二ノ二二番地 水瀬健治 印刷所 東京市淺草區淺草橋二ノ二二番地 鮮校舎印刷所</p>	<p>發行所 東京市目黒區原町一、二一五番地 中野館書房 電話 荏原五二二〇七番 芝原〇七三三・一六三六番</p>

！本たつ作の者育教

本讀學文童兒

定認省部文
薦推會查調物讀童兒市京東



兒童文學讀本は、高等師範の佐々木、守内、木下先生と東京市教育局の藤野先生との御指導の下に、實際教育家を以て組織されてゐる、日本兒童文學協會の先生方が、純教育的立場から作られたものです。又、発行者丸山茂先生も此の三月迄東京雙葉高等女學校教頭の要職にあつて、専門の國語教育を擔當された方です。指導も、編輯も、發行も全部教育者によつてなされた此の本が、全國の先生から、父兄から、兒童から、歡迎される事は信じて疑ひません。
(小林生)

日本兒童文學協會編
各學年用

各學年共
一冊 六十錢
送料(市内) 十六錢
地方 十六錢

……修 監……

生先一秀木々佐
生先郎一喜内守
生先次竹下木
生先郎次重野藤

事主屬附師高京東
事主屬附師高島廣
事主屬附師高女良奈
長課育教會社市京東

・裝幀
・優雅上品
・印刷
・最新式活字
・用紙
・特選高級品
・挿繪
・斯界權威者

地番五一二一町原區黒目市京東
番〇九六九三一京東座日替攝
内館會門ノ虎二町平琴區芝市京東
番六三六一・番二二七話電

所務事

房書館行中 所行發

終

